

アンドレ・ジツドの方法 IX

『インモラリスト』——ソチの観点から

陶 山 曠

『インモラリスト』の読者が奇異に思うことが二つある。一つは、この作品の「序」、今一つは、冒頭の「内閣総理大臣D・R氏へ」の手紙である。

まず「序」については、不必要と思われるほど執拗な、読者への要求にとまどう。ミッシェルを主人公としたこの物語は、異状な精神の病とみられるほど特異だが、時間的には過去にあったものだし、空間的には一般化できる普遍的なものだと読者に訴える。読者には、不遜に感じられるほどだ。

次に、総理大臣への手紙には、たとえ主人公がコレージュ・ド・フランスの代講者であったとしても、単にアカデミックなスノビズム以上のものがあり、これは、作品から逸脱するように見える。大臣への友からのミッシェルについての報告書、それも私的なものだ。にもかかわらず、およそ作品世界に似つかわしくない次の様な要請まである。

——何によってミッシェルは、国家の役にたてるのでしょうか？⁽¹⁾

序に述べられる一般化は、思想的、芸術的範囲をこえ、およそ主人公の世界とはかけ離れた、「国家」的、あるいは社会的一般化にも及ぶと作者が思っているようにみえる。

「序」と「手紙」、この二つの奇妙な印象は、いったい何なのだろうか。

この作品に関して、その成立時期（アフリカ旅行・『地の糧』など）から、どうしても、主人公の内面、作者の個人的苦悩のなかで考えようとしてしまう。青春期のナルシスムから北アフリカでの自己と「自然」の発見、「物」と化してしまうほどの砂漠への熱狂などから、私の『インモラリスト』⁽²⁾ 感も、過去にそのような観点からあらわした。しかし、二つの奇異なもの、とりわけ「手紙」については、気になりながら等閑視してきた。もし、いくぶん観点をずらせば、とくにソチについてふれた後、『法王庁の抜け穴』の延長上でこの作品に光をあてれば、影の部分が、むしろ明瞭な意味をもつてうかびあがるように思われる。それをしばらく追ってみる。

一 在る「自然」

〈感覚〉

ミッシェルは、北アフリカの旅中、病にたおれる。彼の回復期の「思想」の変化をまずたどってみよう。

ビスクラで病に臥せるミッシェルは、生れて始めて、生きようと思う。はじめ視ることが全てだった。太陽を見る影を見る、それが移り変わるのを見る。何も考えられず、ただひたすら視る。妻マルスリーヌが、アラブの少年をつれてくる。無心に遊ぶ少年が傷つけた指から流れる血、それをなめる猫のようなバラ色の舌。少年の血は、自分の吐いた黒ずんだ血塊と何と違うのか。ミッシェルは、激しく生きたいと思う。

感覚は徐々にひろがり、視覚から聴覚、そして触覚へとひろがる。

——私は見ていた……ああ、月の光よ！

……私は聞いた……全てを……私は木の樹皮を愛撫するように触れた。⁽³⁾

感覚が目覚めてゆくにつれて、彼の健康も蘇ってゆく。長いあいだ知的な生活のため忘れ去られていた感覚は、さらに思考をこえ、あふれ、それを否定するかのようになる。

——……私は、……和らげられた輝く日を感じていた。私は、何も考えなかった。思考など何になろう。私は異状なほどに、ただ感じていた。⁽⁴⁾

健康が回復するにつれて、ミッシェルは、アラブの少年達と興じ、日を過ごした。ある日、妻マルスリーヌのお気に入りらしい少年、モクテイルの異様な行動が語られる。ミッシェルは、暖炉にひじをつき本を読むふりをし、炉の上の鏡を見ている。モクテイルが映っている。少年は見られていることに気づかず、妻のしまい忘れたテーブルの小さな鉄をこっそり取り、外套の下に隠した。この盗みをのぞき視ながら、ミッシェルの抱いた感情は異様だった。彼は、この盗みに喜びを感じた。妻にどうやって少年をかばい、どんな創り話をでっちあげようかと思う。

この日以来、ミッシェルに、新たな思考が始まる。

まず、死の恐怖。しかし、生への執着からくるものだ。

——（ビスクラの小さな中庭）

……けれど、眠りの中でさえ、生命の鼓動があるものだが……ここでは、何も眠っているようではない、全てが死んでいるようだ。この（夜の）静けさに私は恐怖を覚えた……生命への悲劇的感覚が、この沈黙の中で抗議し、主張し、嘆くかのように……私を襲った……私は自分の手をとった……右手の中に左手をにぎった……なぜなら、私が生きていることを確かめるために……

私は思った、ある日来るだろう……ひどいほどの渇きにも、水さえ唇に持ってくる力のない日が。

……私は、テーブルの上の一冊の書物を手にした……聖書を……⁽⁵⁾

感覚をとおして思考がはじまる。

〈肉 体〉

ビスクラを後に、チュニスへてマルタへ、そこからシンリーのシラクサへと二人は帰路につく。途中にたちよる古代の劇場や神殿も、今のミッシェルには死の匂いのたちのぼる悍ましいものになる。なぜなら、彼は変った。過去の歴史は、ビスクラの小さな中庭、夜の暗のなかの恐ろしい静けさ、死の静けさとなった。歴史上の出来事は、全て博物館の部屋、植物標本のように思えた。もし歴史への関心がのこっているとしても、それは、現在の中で想像するばかりだ。シラキューズで、テオクリットを読みなおしたが、作品中の美しい名の羊飼いは、ビスクラで彼の愛した少年たちとなる。

——……古代の祭りも……廃墟もそれが死んでいることで、私は悲しい。死へと恐怖を抱いているからだ、私は、遺跡から逃げた。どんな美しい記念物よりも、ラトミーの庭園を愛した。そこではレモンが咲き、シアネの河は、

プロスペリヌを涙させた日と同じように、パピルスの中、青く流れている。⁽⁶⁾

死にふれた後、彼には、それまで大切と思われたもの、研究生活から得られた知識の山は、もはやどうでもよいものとなる。それはなお彼らしく、羊皮紙の二重写本にたとえられる。表面の新しい文字の下に、ずっと価値のある古いテキストが発見されることにたとえられる。しかし、この人知の及ばぬテキストは、何なのだろうか。ミッシェルは、まず、表面の文字を消そうと思う。ここには、単なる健康への回復以上のものがある。過去の知識、思想、論理の抹消、そしてそこに生れる霧にかくされているものを、まだ定かではないが、「新しい人間」と彼は呼ぶ。

イタリアのラヴェロ。海岸に遠いというより空に近い村で、蒼空に張り出たような断崖のホテルに滞在する。地中海の温暖な気候と自然の中で、彼は、ますます健康になる。ある日、小さな泉をみつけた彼は、全身を陽光の灼熱感につつまれ、そこにとびこむ。

——（小さな滝が穴をうがち清水のたまっている泉）……渇きと欲望に満たされ、その縁に横たわった。長いあいだみがかれた岩の水底を見つめていた……日の光がふるえ、様々な彩りとなりさしこんでいた……かつてなかったほど澄み切った水に進み、一気にとびこんだ……日の当る草の上に横たわり……ハッカの葉でぬれたからだをぬぐった。

……自分の体を、恥かしいとは思わずに、むしろ喜びをもって見つめた。まだ強健ではないが、そうなりうる調和のとれた、官能的でたぶん美しい自分を見た。⁽⁷⁾

死と生の問題を思考しつづけることなどさけて（「本当のことを言えば、私は少しも思考しなかった」）遺跡から、

過去から、ミッシェルはひたすら逃げていく。新しい自己、聖書のいう「古い人」を否定した自己、パランセストの隠された文字である自己、すなわち真実の自己を見出そうとするために。しかし、それが何であるか彼にはまだわからない。それは、思考を越え、あふれでてくるのだ。ただわかることは、この変化にふさわしい自己の健康な肉体をつくることだ。さらに意志的に、彼は変化にふさわしい外観をつくろうとしていく。

〈いつわりの外面〉

ミッシェルは、髭を落す。それは、モラルの上でも肉体の上でも、新たな人間になるための過程と彼は思った。と同時に、彼の変化をマルスリーヌに気づかれはしまいかと不安になる。彼は、いつわった自己を見せようと思う。感覚による生命の発見は、少しづつ、倫理的な暗い影を濃くする。

——……マルスリーヌが愛し結婚した者は、私の「新しい人間」ではなかった。……それで過去に忠実で変らぬためには、日日、偽りとなっていく姿を彼女に見せることになった。⁽⁸⁾

——……最悪のこと(うそ)は、まだ犯されていない限りは、なかなか犯すことは難しい。しかし(一度犯されれば)再び犯すことはたやすく、楽しく、甘美なことになり、やがて自然なことになると、すぐわかりはじめた……
 ついには、欺瞞行為自体に喜びを見出し……深い幸福感にむけてすすんでいた。⁽⁹⁾

〈外面から行為へ〉

ソラントでミッシェルは思わぬ体験をする。道すじ、彼は徒歩で先に立ち、後から妻は馬車で追ひ、落ち合うこと

にした。その場所に近づいたとき、後から途方もないスピードで馬車が来る。御者は酔っている。落ちそうになるマルスリーヌが見える。と馬が倒れる。ミッシェルは駆けつけ、御者に飛び掛る。二人は、地面を転げまわるが、御者はおさえこまれる。ミッシェルは、彼の首をしめる。彼は勝った。

その夜、彼は妻をはじめて抱く。二人は幸福に浸る。

——私は、人生からもはや瞬間がもたらし、もちはこぶものしか認めなくなった。……おお、肉体の喜びよ！ と私は叫んだ。私の筋肉の確かなリズムよ！ 健康よ！⁽¹⁰⁾

しかし、ミッシェルが、その健康の力を他者に示したとき、ある逸脱が感じとれる。御者との格闘に際し、

——ああ醜悪な人間だ！……彼を締め殺すことは、ごく正当なことに思われた……そして多分、そうしたかも知れない……少なくともそうすることができると感じた。今思うのだが、警察という考えだけが、私をおしとどめたのだと。⁽¹¹⁾

この逸脱は、さらに不安な影をミッシェルにおとす。表面は、幸わせの中での平穏な日々が続く、彼は帰国を考える。妻もそれを望んでいた。また、ミッシェルに仕事の意欲ももどってきた。もっとも過去に関する抽象的な歴史には興味もてない。記号は生活の残滓、その奥にある野性的な高貴さを究めようと彼は思う。

東ゴード王国の若きアタリスクに彼は魅かれる。この王子は、ラテン文化の教育を拒み、野蛮なゴード人を好み、無頼な生活に飽きはて、十八歳で破滅的死をむかえた。そんな研究の意図をもつミッシェルに、コレージュ・

ド・フランスの講座をもつようさそいがくる。彼は、静かな学究生活にもどる。しかし、「新しい人間」である彼の発見したものを、歴史研究のなかで表現しようと思う。思想化のこころみを考える。

〈社会化——あるいは外面の思想化〉

ラ・モリニエールにつくとすぐ、マルスリーヌは妊娠した。ミッシェルの心はなごみ、安心して今と未来を考え、この「温和な土地」の忠告に耳をかたむけている。そんな彼に、調和ある思想が生れる。というより感覚の覚醒、健康な肉体の回復、他方、死への恐怖と生への讃歌、そしてあふれでる自己の力の激発（御者との格闘）、つい今、妻の妊娠により、自己の思想の均衡が必要となった。人間が管理することで、調和のとれた自然を、彼の倫理と考えるようになる。

彼は、想う。

豊かな収穫を準備しているこの土地は、彼にある影響を与える。この土地は、「秩序ある豊饒」、「喜びにあふれた隷属」による調和をつくっている。すなわち、人間のものであると同時に、自然のものであるリズムと美。自由な自然のはちきれぬばかりの豊かさ、それを調整し、支配しようとする人間のかしこい努力が、一つのものとして融合している。人間のこの努力は、支配される力強い野性がなかったら、無駄となるし、同時にこの生氣に満ちた野性、自然も、それを制御し、豊饒に導く人間の知的努力がなければ、何の役にもたたない。

——そして私は、このような夢にふけてゆく。全ての力が巧みに調整されているので、支出は、全て補填され、やりとりは全て厳密に行なわれ、どんな小さな損失もわかるような土地の夢に。

次に、私の夢を人生に適用し、私はひとつの倫理をつくった。それは、抑制された知性により自己を完璧に使う

科学である⁽¹²⁾。

人類の知性による自然の支配、そして自然との調和という語で、あたかも自然の方も、その美しさを発現できたかのような自然観、それは、近世ヨーロッパ人のごく常識的な自然観のひとつだろう。それはまた、現代においても「在る自然」観でもある。ミッシェルは、この自然観を自己の生きる倫理とする。彼は、小作地の管理人ボカージュと耕地の管理、整備にかけずり回る。彼の息子シャルルと出会い、その改革にも手をつける。思想は、社会化されたといえるだろう。しかし、生活を秩序だてることに興じながら、他方、彼の内面、研究では、ゴート人の野性的な倫理に夢中になってゆく。彼は、二つのものに分割されてゆく。

——……未開状態を覚悟し、弁護しながらも、他方では、そんな未開状態を思い起させかねないものは、いっさい抑えようと努めていた。

この知性、さもなくばこの狂気をどこまで私は押し進めたのか。⁽¹³⁾

二 在りうる「自然」

〈所有の否定、あるいは社会の……〉

秋も深まり、ラ・モリニエールを去り、ミッシェルはパリに戻り、社交生活に月日を過ごしている。そこで出会う人々に、彼はうんざりする。生命を感じさせない、似たような凡様な人々。彼は、死者の家から戻ったような異邦人であり続ける。

コレージュ・ド・フランスでも彼は、文化は生命から生れて、生命を殺すものだと言講する。盛期の文化も、その生

命の横溢が流す分泌液の凝固した皮膜により、その生命と精神の接触がたたれ、そこで衰退していくと彼はいう。そんな孤独な彼の前に、メナルクがあらわれる。

メナルクは、作品中、ミッシェルへの誘惑者として登場する。『法王庁の抜け穴』のプロトスのように一見みえる。しかし、ミッシェルは、インモラリストとして破滅してゆくが、メナルクは必ずしも、単なる誘惑者の役割に霧散していくようには思えない。むしろラフカディオがやりたいと望んだ人物のような具体性をもつ明瞭な人物像をもっている。そして、ミッシェルの崩壊のかたわら、彼のありえたいと思つた思想を具現しているともいえる。メナルクを通して、その思想をおつてみよう。

メナルクは、モクティルの盗んだ錠をミッシェルに渡し、彼のアモラルな行動を意味づけようとする。

彼は、ミッシェルにある「感」が欠けているとさそう。「倫理感」の欠如とミッシェルはいう。彼は、むしろ所有意識の欠如だという。ここには言外に含まれる意味がある。

まず所有は、経済的所有である前に、心理的主体の所有である。ミッシェルは、鏡の中の映像で、モクティルの盗みを見ていた。しかし、モクティルの方が、自分を鏡の中で覗いているミッシェルに気づき、彼を視ていた。鏡を通しての主体と客体の転倒、すなわち視ていると思つた主体が、視られている客体に変貌する。すなわちミッシェルの主体の喪失。これは、そのまま、メナルクのいう倫理の意味に移行する。既存の私という主体がこわれることで、新たなミッシェルになる。私という所有の観念が失われた上で、メナルクのいう何も所有しない人物が生れる。

メナルクは、ひとりホテル住まいをし、何も所有しない。孤独あるいは、孤高な人生をおくる。彼によれば、人はひとりになることを怖れる。各人は、自分のパトロンをつくり真似る。そのパトロンを選ぶともいえない。既制のパトロンを受け入れるだけだ。皆、真似るだけの醜悪な広場恐怖症者。他人と異質なものをこそ価値があるとメナルクはいう。

メナルクは、ミッシェルの所有しているものを指摘する。彼の講義、土地、豪華な住まい、そして妻と待たれる子供。

しかし、メナルクも動揺する。長い危険に満ちた旅に出発する前の晩には、孤独を愛する彼も、ミッシェルとともに過ごし、語りあいたいと思う。この動揺は、ミッシェルに出発を躊躇しているのかと質されるほどだ。彼は、自分を納得させるかのように言う。

——妻子のあるあんたはとどまりたまえ、人生には幾千の形があり、そのひとつしか体験できない。幸福は、各人の寸法にあったものだ。

私は、明日出発する……この幸せを私のせたいけにあわせて発つような心がけている。あなたは、家族の幸せを守るんだな。⁽¹⁴⁾

彼の主張は、さらに悲愴となる。全ての喜びが彼を待ちうけているとしても、それは、一日のうちにくされゆく砂漠のマナに似ている。プラトンのいう壺にくみおけないアメレスの泉に似ている。各瞬間にしか幸福はない。過去は、遠くにすてたままにする。自分の影から逃がれるためにメナルクは、鳥のように飛びたつと語る。

——たとえば、私たちの凡様な頭脳が、思い出を香りでかぐわしく満たすことができたとしても、その思い出は、永くは保たれない。もっとも繊細なものは失われる。もっとも官能的なものは、腐っていく、もっとも甘美なものは、次には、もっとも危険なものになる。人が後悔するものは、最初は甘美なものだ。⁽¹⁵⁾

ミッシェルは、メナルクのシニックな喜びが「人工的」であることを望む。「在る」観念から、あまりにへだたれるからだ。しかし彼は、所有しているものが、自ら所有を損なう彼の土地での密猟を、悪童たちと楽しみ、ついには、その小作地全体を手放す。ずっと後、浪費を重ね、全てを使い果たす旅の途中、貧しい者たちの中で寝、彼らと同じになりたいと願う。既成の社会（在る社会）を否定しざる情念にとらわれていくといえるだろう。

〈文化の否定、あるいは人類の……〉

メナルクと一夜を過ごし、帰宅したミッシェルを待ちうけていたものは、妻の流産であった。自然との調和のとれた幸福の象徴であった子供が失なわれる。足もとで突然大地が崩れるかのように彼は感じた。そして妻の体内にも病が入り、住みつき、汚した。所有するものが、いくつか崩れ去ってゆく。「在る自然」が崩壊したのだ。

そんな彼が追い求めていくものは、かわらず感覚である。それも夜の世界のそれとなる。野性の生命に、アナルクに酔い、ベットを怖れ、納屋を望んでいる自分に気付く。彼のまわりでは、全てがこわれていき、そのなかで、彼は、ある神秘、新しい未知の世界を創造しようとはがく。それは、社会とともに過去の文化をも否定しようとする情念となり、暗く燃え上る。メナルクが彼に説いた文化についての論は、これまでのミッシェルを代弁するかのようであった。ゴートの文化の衰退を、生命との絆を失ったことに帰するミッシェルに、メナルクはこう説いていた。

——現代の詩、とりわけ哲学を死の文学としている……理由は、人生から離れたからだ。ギリシヤは、直接、人生を理想化した。それゆえ、芸術家の人生は、それ自体、詩の現実化であった。……人生に交わることで、哲学は詩を養わない、詩は哲学を養わない……説得力をもっていた。今日では、美は行動しない。行動は、美であることを気かけない。知性は、孤独に思考されるだけ。⁽¹⁶⁾

今のミッシェルは、このかろうじて調和のとれた、自然と芸術のかかわりを否定しはじめる。あのモリニエールで抱いた自然と人間とのかかわりを否定しはじめる。所有の拒否は、社会的であるが、その文化の拒否まで彼はすすみ始める。そしてその先に、何かを追い求める。

——今では、若きアタリック自身、私に語りに墓から起きあがり得た……古代人の答が、どれほど私の質問に答えてくれたことか。

……人はさらに何ができるのか……これまで人間の言ってきたことが、はたして言いうる全てだったのか。人間について知られなかったことは、もう何もないのか。まだ言うべきことが残っていないのか。

……そして日日、文化、社会通念、道徳が覆い、隠してきた手つかずの豊かさにたいする感情が、大きくなってきた。

そこで私は、何か未知のものを発見するために生れてきたように思えた。……その研究者は、文化、社会通念、道徳を棄毀するように捨てなければならぬと私はわかつた。⁽¹⁷⁾

文化とそれをめぐる全てを彼は否定し、何かを求める。それも「うす暗い」探究であり、「異様な情熱」による探究でもある。彼は少しのちに、「この堪え難い論理から解放してくれ」と叫ぶ。まさしく論理の否定と破綻の苦悩であり、未知の人類の創造の苦悩でもある。『抜け穴』のラフカディオを想わせる。

彼が、アラブについて、芸術作品がない土地といい、それと対比し、記述され解説された美しか認めることのできぬ人々を軽蔑するというとき、言語の否定にまでいきつく。

——アラブの人々は、芸術を生き、歌い、そして日日、霧散させてしまう……いかなる作品としても永く記憶にとどめない。偉大な芸術とは、あまり自然なので、どうしてもこのときまで、これも美しいことがわからなかったかと言わせるものだ。⁽¹⁸⁾

この文化の徹底した否定は、既存の人類の否定にまでいたる。

——芸術が、私から去ったと感じた……もはやそれは、以前のほほえむような調和ではない……私はどんな暗い謎につつまれた神につかえようとするのか。おお、新しい神よ！ 新しい民族、美の思いもよらぬ形に気づく力を与えて下さい。⁽¹⁹⁾

ミッシェルは、オアシスより砂漠の方が好きだと想う。なぜなら、人間の努力などそこではみにくく悲しいものに見えるからだ。砂漠は、人間の否定であり、人間のつくった社会、常識、道徳の否定であり、それを論理づける文化、言語そのものを拒否する。ミッシェルは、その死する栄光と不寛用な荘麗さのなかで、自己の存在理由、新しい論理を創らねばならない。

ここで、はじめの問いにもどってみよう。作品の序は、その特異性が世界の転倒をもくろむほどの意味をもっているかもしれないことを示しているようだ。また冒頭の手紙は、国家という近代ヨーロッパの象徴の転覆をもくろむ「背徳者」にふさわしいものだろう。ソチに近づけ、この作品を読みなおすことは、作品の異常な病の世界を、あらたな光源で照らすことになるだろう。

註

- (1) André Gide : L'immoraliste (Mercure de France) p. 12.
- (2) 東京都立大学「人文学報」(一〇二号)、「城西人文研究」(第四卷五号)
- (3) André Gide : L'immoraliste (Mercure de France) p. 47.
- (4) Ibid. p. 51.
- (5) Ibid. p. 58.
- (6) Ibid. p. 62.
- (7) Ibid. p. 68.
- (8) Ibid. p. 71.
- (9) Ibid. p. 71.
- (10) Ibid. p. 72.
- (11) Ibid. p. 74.
- (12) Ibid. p. 84.
- (13) Ibid. p. 95.
- (14) Ibid. p. 123.
- (15) Ibid. p. 124.
- (16) Ibid. pp. 123-124.
- (17) Ibid. p. 158.
- (18) Ibid. p. 170.
- (19) Ibid. p. 174.